

卓見 異見

ファーストスター
・ヘルスケア社長
西川久仁子



にしかわ・くにこ 86年(昭61)東大法卒、92年米スタンフォード大経営学修士修了。00年スーパードクター社長。医療に携わる人材の研修・紹介のファーストスター・ヘルスケアを10年に創業し、社長に就任。新潟県出身、51歳。

現在、東日本大震災の被災地で看護師さんに働いてもらうプロジェクトを支援しており、先日被災地の病院にインタビューに行った。

町は新しい建物があり、かなり復興している。時折ある空き地は、津波に流されたまま建て直されていない家屋の跡というところだが、言われてみないと分からず、昔から空き地だったと言われれば特に疑問には思わない。

看護師についても、数としてはそれなりに充足しているようだった。しかし、よく話を聞いてみると、やはり被災地ならではの看護師不足の状況が分かってきた。

奮闘する被災地の看護師

若手減り夜勤が困難に

看護師の数はそれほど減ってはいないが、夜勤ができる若い看護師さんたちは沿岸部から内陸部に移住し、現場で働いているのは年齢の高い人やパートの人だそう。そのため、夜勤をする看護師さんの絶対数が確実に減っている。

また、患者の層も変わったという。私が行った被災地の病院は、津波の被害を受けた後に復興し診療を再開しているが、沿岸部の他の市では、診療を再開していない病院も多い。このためその病院に他の地域からの患者さんがたくさん来

ている。

生活圏が違うところの患者さんなので、家族のお見舞い回数がどうしても少なくなる。そういった患者さんをサポートするために、看護師の力が以前に増して必要になっている。

「向き合っ」余裕あれば

別の精神科の病院では、地震の後、近隣の認知症のお年寄りが避難に来て、そのままずっと入院している。本来なら帰宅してもらいたい患者さんたちだが、仮設住宅に帰すわけにはいかない。認知症の方々に対応するにはかなり看護力が必

要なので、以前にも増して看護師不足となっている。それでも、その病院の看護部長さんは「私がどうしてもお年寄りたちを受け入れる、と言ったのよ」と笑っていた。

看護師さんたち自身も当然被災している。お話をしてくれた一人の看護師さんは、津波で家が流され、電車で1時間ほど内陸部の祖母の家に子どもと一緒に避難している。そこから毎日沿岸部の病院に通ってくる。内陸部の病院にいくらでも就職口はあると思うが、自分の病院の患者さんたちのために頑張っている。

また別の看護師さんは身内を一人亡く

沿岸部、なお不足感強く

しているが「私なんかは被災者ではないわ」と全く明るいのだ。

看護師さんたちが言うのは「震災前のような、ある程度余裕をもった看護がしたい。今は人が足りず、患者さんの層も変わったので、いつも仕事に追われて患者さんと向き合った看護ができない。

看護師と患者さん双方が満足できる看護をするために、多くの看護師さんに働きに来てほしい」ということだ。看護の観点からも、まだまだ被災地は復興していない、ということがよく分かった。

共感力・献身力に驚嘆

それにしても、看護師さんたちは、自分の生活も大変であろうに、まずは患者さんの満足できる看護をすることを何より優先する。本当にすごいなと思った。

今の仕事をするなかでいろいろな看護師さんに出会う。面談の際にずっとブスツとしていて、最初からタメ口の方などなど。しかし、どんな方も、患者さんの前に出るとまるでスイッチが入ったように「看護師」になる。その共感力、献身力には驚嘆する。

そしてみんな現場が好きだ。怖い顔をして管理能力バリバリの看護部長さんも「本当はやっぱベッドサイド(患者さんのところ)が好き」と言う。

私が今の業界に13年以上おり、これからもこの業界にいたいと思うのは、やはりこうした看護師さんたちを素晴らしいと感じ、何か力になりたいと思っているからだ。

もちろん医療業界では医師も素晴らしい。しかし、医師は看護師に比べるとステータスもあるし、いろいろと影響力も持っている。私はやはり看護師の力になりたいと思ってしまう。

最後に、もしこの文を読んでいる方で、被災地で働いてもよい、という看護師さんをご存じの方がいらっしゃれば、是非当社まで連絡をいただきたい。

(次回から新しい執筆陣に代わります)